

壬生六齋念仏由来

4.六齋講

六齋念仏は全国的に行われてきたものですが、特に京都のものは数が多く盛んです。また、芸能六齋という展開が見られたのも京都ならではの。

昔から京都で六齋を奉仕してきた人々というのは、京都近郊の村々に住んでいた人達で、当時だいたい一つの村単位で六齋団体を為していましたが、この団体を**六齋講**と呼んでいました。講とは、村人同士が協力し合うための組織形態を指し、その構成員が六齋を奉仕したので六齋講といいました。

芸能の六齋講は、かつてあちらこちらに出張し芸を披露していたようで、市中にも勧進(かんぜん)と称して進出していき、他所の六齋講とは激しく芸を競い合ったといえます。

天明七(1787)年六月の『拾遺都名所図絵』には「六齋念仏在郷よりおのおの組を立て都の町々に出て、孟蘭盆会魂祭の馳走に家々の所望により行いける」とあります。

壬生六齋念仏は、壬生村の**壬生六齋念仏講中**によって行われているもので、村という単位が無くなった今でも、その名称は続いています。

以前には若中といういわゆる青年組織の参加者が主になって運営していたのですが、現在では地元の有志者が講を組織しています。

5.重要無形民俗文化財

壬生六齋が正確にいつから始まったものかは今や知る術はありませんが、1755年には空也堂系に属していたという記録が空也堂にあるそうです。

また、講には文久二年(1862年)七月の銘をもつ鉦(二丁鉦)が伝わっています。大正年間に古文書や道具類を収納していた家屋が焼けたため、そのほかの史料はほとんど残っていません。

近代の記録としては、空也堂に残る明治17年8月の『六齋念仏収納録』と明治40年の同記録にも壬生村の名前がうかがえます。この記録書は、各地の空也堂系六齋団体から入費が納められた控えです。

壬生六齋は、明治時代には大変盛んだったようで日露戦役の頃には“相当にやっていた”そうです。



戦前の壬生寺での奉納(場面は祇園囃子)、8月23日(地藏盆)

しかし、昭和13(1938)年から活動を中止しました。

戦後は昭和20(1945)年に、京都第一日赤病院で外国人負傷兵を対象に公演を行ったのを皮切りに、翌年、歌の練習を始め、さらにその次の年には、新会員を募集し、『祇園ばやし』を復活練習しました。昭和26年には柵経を復活しました(しかし、後に中断)。

昭和37(1962)年に壬生寺の本堂が焼失してからは、それまでは本堂の上の北西せり出し部分で奉納していた(上の写真はその舞台)ものを、本堂の前に組んだ仮設舞台でするようになり、この形が現在も続いています。



昭和26年、壬生の朱雀第三小学校30周年記念に講堂で披露される獅子舞

昭和52(1977)年には、京都市内の六齋念仏講が**京都六齋念仏保存団体連合会**を結成、壬生六齋も加盟しました。

昭和58年、京都市で継承している六齋団体は一括して国から**重要無形民俗文化財**(記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財)の指定を受けました。



1970年代の壬生寺の舞台。場面は『四ツ太鼓』

また、壬生の者は祇園祭の2つの傘鉾に棒振囃子を奉仕する慣わしでしたが、明治以降傘鉾がその活動を休止していましたので、段々とその関係は廃れていました。しかし、壬生の六齋念仏や狂言に伝わる祇園囃子や棒振りは、これらの鉾のそれを伝えていることが広く承知されていたので、昭和48(1973)年には、壬生六齋念仏講中が囃子方として参加する格好で、綾傘鉾の復活が実現しました。これは現在でも続いています。

その他の活動としては、地元の朱雀第三小学校で、子供達に「四つ太鼓」や「獅子舞」を教えていることが挙げられます。これは、郷土の伝統芸能学習の一環として始められた試みで、他の芸能六齋保存会でも同様の活動が盛んです。朱三小ではこれを“六齋キッズ”と命名し、2005年からは8月9日の壬生六齋奉納前に発表会を行っています。

[参考図書]

田中緑紅『六齋念仏と六齋踊』緑紅叢書第3年第2輯第26輯(昭和34年、京を語る会発行)

同上「ふるさとの祭と行事」(昭和44年、京を語る会発行)

芸能史研究会編「京都の六齋念仏調査報告書」(昭和54年、京都六齋念仏保存団体連合会)

[京都市立朱雀第三小学校](#)「創立70周年記念写真誌『輝ける70年の足跡』」(平成3年)

壬生六齋念仏講中「重要無形民俗文化財壬生六齋念仏保存会由来」(パンフレット)

[六齋時記](#)へ

京都市内に伝わる各六齋団体の紹介

[もどる](#)